

大和山河抄

昭和三十七年五月二十日初版發行
昭和三十七年六月二十日再版發行

著者 山本健吉

發行者 渡邊久吉

發行所 人文書院
京都市下京區佛光寺高倉西
振替 京都 一一〇三

本文紙 本州製紙株式會社
印刷所 株式會社文功社
製本所 新生製本所

定價 四八〇圓



山本健吉

大和山河抄

人文書院



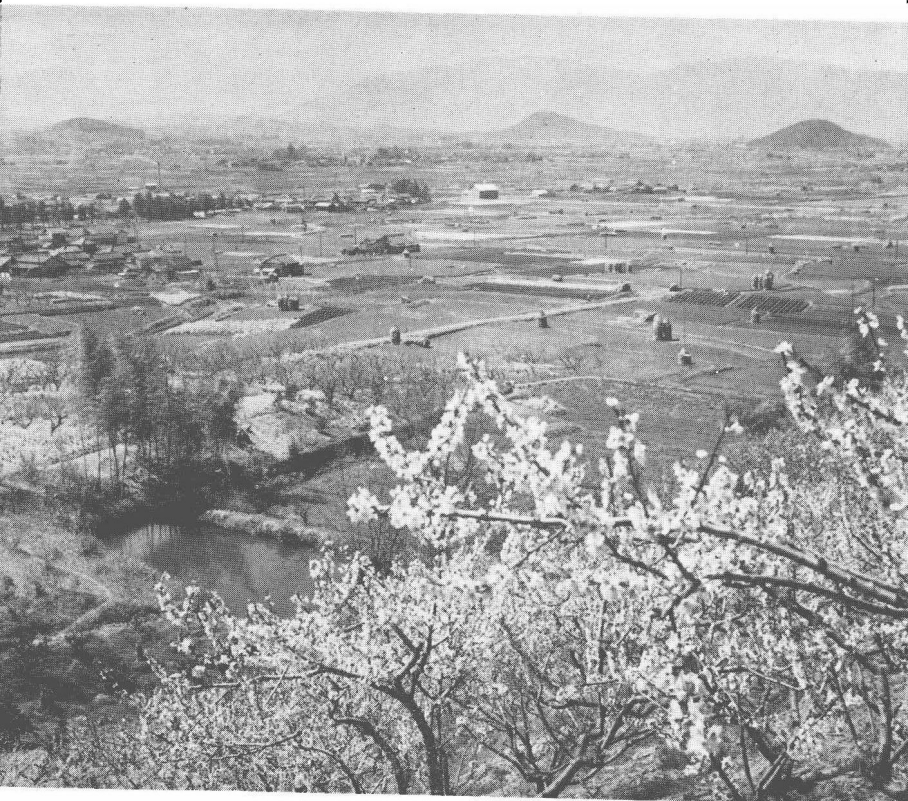
左から、穴師、巻向、三輪山
巻向川北口橋附近の池畔にて



飛鳥坐神社

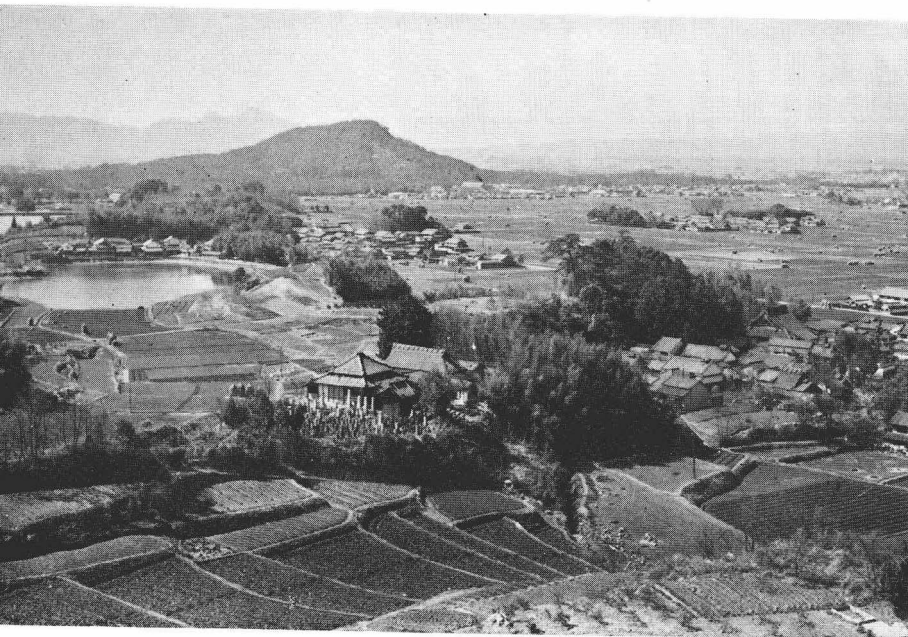


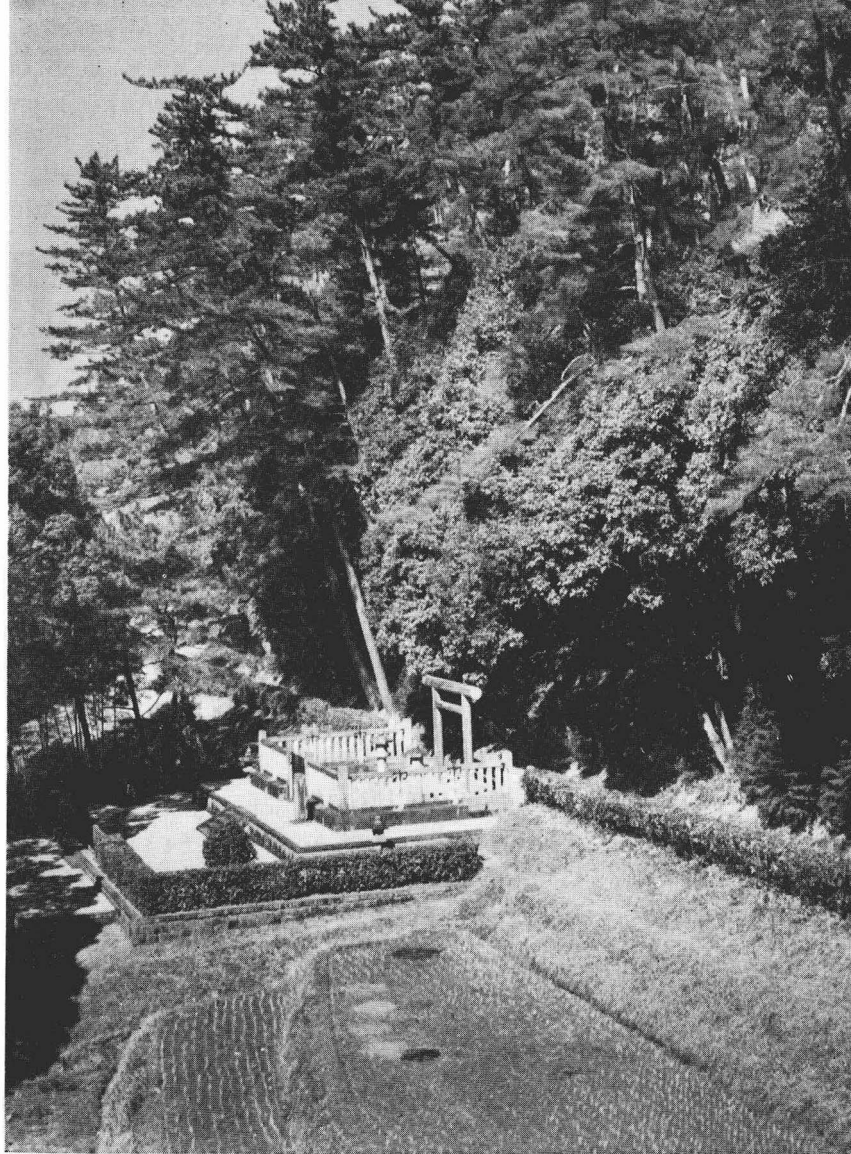
飛鳥部落、上方の柱が飛鳥坐神社



左から、香久、畝傍、耳成山
三輪山の西北麓にて

甘樫の丘から (上) 飛鳥川、雷の丘と、後方耳成山
(下) 豊浦郡落と、後方畝傍山



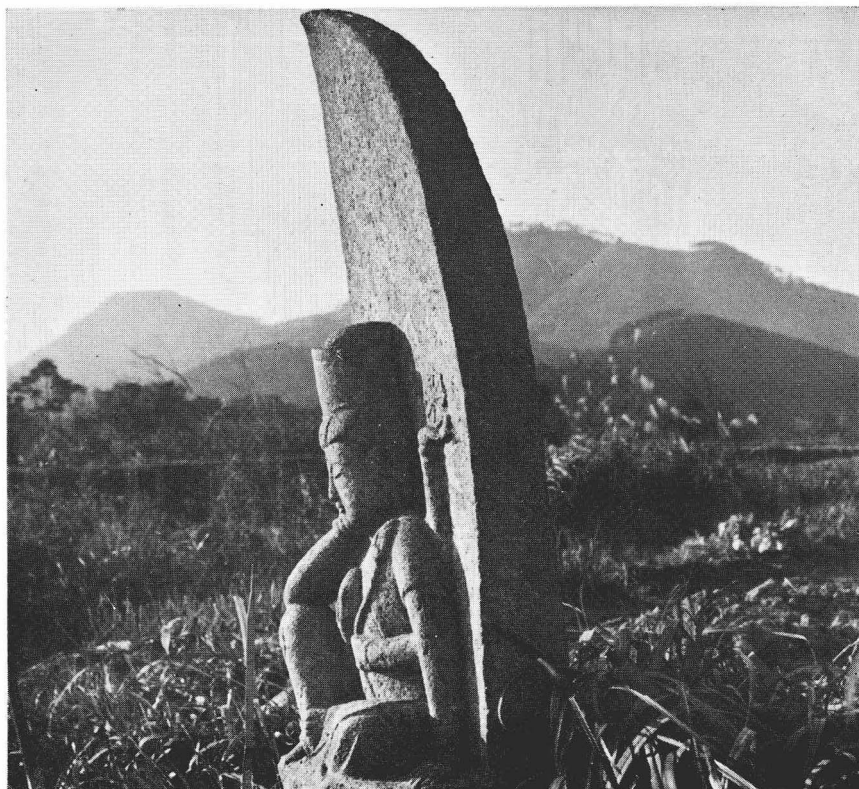


舒明天皇、忍坂内陵

雁多尾畑と、右上隅、滝田神社の社
滝田川畔にて



试读结束：需要全本



(右) 当麻、石光寺道から二上山
(上) 安騎野、長山の歌碑

大和山河抄

目次

古代人との觸れ合ひ(序)	一五
飛鳥路をゆく	二七
うまさげ三輪の山	三〇
みささぎの美學	三九
龍田と廣瀬	四三
忍坂と啼澤の杜	八
當麻から巢山へ	一五

美女の村、美男の村

山の邊の道

安騎野の宿り

吉野の東口

吉野離宮のあと

飛鳥川を遡る

あとがき

三三

二七

一五

一六

一七

二〇

三〇

口繪寫眞・十葉
本文寫眞

入江泰吉
山本健吉

古代人との觸れ合ひ (序)

だいぶ前に、法隆寺を訪ねたとき、早稻田の學生たちを連れた會津八一氏と、ばつたり出會つたことがある。そのとき、何の佛像の顔だつたか、懷中電燈をさしむけた學生の一人に、會津氏が言はれた言葉を、今でも忘れない。

「懷中電燈で照らしたつて、佛さんは分らないよ。」

巻尺や懷中電燈持參で大和の古寺巡りをするアマチュア人種が、そのころやたらにふえてきたころだつた。いや、今でもますますふえてゐるのかも知れない。知識的なディレッタントは、切手や郷土人形の蒐集家と同じで、古美術についての知識を蒐集して廻らうとする。ドレスメーカーのやうに、佛像の丈に巻尺をあて、美容師のやうに、顔をぶしつけに照し出さうとする